

機関番号：17401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2009～2010

課題番号：21830085

研究課題名（和文） 構築主義に基づく中学校社会科教育課程の開発研究

研究課題名（英文） Developing the Social Studies Curriculum of Junior High School Based on Constructivism

研究代表者

藤瀬 泰司 (FUJISE TAIJI)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：30515599

研究成果の概要（和文）：現行の中学校社会科は、分野制に基づいて、日本人や日本国民の立場からみた地理や歴史や社会の事実を客観的な真理として教授するため、価値多元社会に相応しい国家・社会の形成者を育成することができなくなっている。そこで、本研究では、この問題点を克服すべく、地理や歴史や社会の事実が社会的に作られていることを子どもに学習させ、その多様な可能性を議論させる構築主義社会科論を提起し、中学校社会科の教育課程を開発した。

研究成果の概要（英文）：In junior high school, we teach students geography, history, and civics from the viewpoint of the Japanese as an absolute truth, by systematic learning. In the result, we don't bring up children as democratic citizens for today when the values of the people have diversified. Therefore, in this paper, we propose the new theory of social studies based on constructivism, which is to teach children that geographical, historical, and social facts are constructed socially, and have children argue the chances of the various facts. By this educational theory, we develop the social studies curriculum of junior high school which can bring up children as democratic citizens for today when the values of the people have diversified.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	710,000	213,000	923,000
2010年度	660,000	198,000	858,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,370,000	411,000	1,781,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：構築主義、中学校社会科、教育課程の編成、授業の開発と実践、学習評価の実施

## 1. 研究開始当初の背景

価値多元社会に相応しい国家・社会の形成者を育成するためには、中学校社会科の教育課程をどのように編成すればよいのだろうか。

小中学校の社会科や高校の社会系教科は現在、子どもに学習意義を見出させることができず、国家・社会の形成者を育成するという目的をうまく遂行することができなくなっている。その大きな原因のひとつは、我が

国が日本人や日本国民という社会の同質性を前提にした社会科を構想してきたことにあるのではないだろうか。小中学校の社会科や高校の社会系教科は、日本人や日本国民の立場からみた地理や歴史や社会の事実を客観的真理として教授することによって、日本人や日本国民に相応しい資質や態度の育成をめざしてきた。その結果、価値多元社会の現実うまく対応することができず、国家・社会の形成者を育成するという教科の役割をうまく果たすことができなくなっているわけである。

こうした社会科の機能不全が最も深刻なのが中学校である。中学校社会科は、地誌・通史・制度学習を各分野で組織する分野制に基づくことによって、日本人や日本国民の立場からみた地理や歴史や社会の事実を客観的真理として教授し、それを系統的かつ体系的に教授している。それに対して、分野制を取らない小学校社会科は中学校ほど系統的に学習させることができないし、高校の社会系教科は科目制を取るため中学校ほど体系的に学習させることができない。中学校社会科は、分野制に基づくことによって、日本人や日本国民の立場からみた地理や歴史や歴史の事実を系統的かつ体系的に学習させるため、価値多元社会に相応しい国家・社会の形成者を育成する上で最も深刻な課題を抱えているわけである。

それでは、価値多元社会に相応しい国家・社会の形成者を育成する中学校社会科教育課程を編成するためには、どのような考え方に基づけばよいのだろうか。そこで、本研究では、構築主義という考え方に注目した。構築主義とは、国家や社会の現実を構築する人々の言葉、つまり言説に注目して、社会的現実を分析する立場である。そのため、この考え方に基づけば、社会科とは地理や歴史や社会の事実を人々に外在する客観的真理として学習させるのではなく、その事実を人々の言葉を通して社会的に作られていることを子どもに学習させる教科となる。また、この考え方に基づけば、社会問題は、人々に外在する客観的実在ではなく、既存の国家や社会の現実が問題視され、そのよりよいあり方が議論される論争問題とみなされる。したがって、空間や記憶や規範の編成が争点となる社会問題を教材に取り上げれば、様々な人々が空間や記憶や規範のあり方を議論することによって、地理や歴史や社会の事実が社会的に作られていることを学習させることができる。このような考え方に基づいて中学校社会科の教育内容を開発すれば、日本人や日本国民という特定の立場からみた地理や歴史や社会の事実を客観的真理として絶対視させることなく、その多様な可能性を子どもに議論させることができるため、価値多元社

会に相応しい国家・社会の形成者を育成することができるのではないだろうか。

## 2. 研究の目的

以上のような問題意識のもと、本研究では、構築主義に基づく新しい社会科教育論を提起することによって、価値多元社会に相応しい国家・社会の形成者を育成する中学校社会科の教育課程を開発するという研究の目的を設定した。具体的には、本研究は、空間や記憶や規範の編成が争点となる論争問題学習を組織することによって、地理や歴史や社会の事実が社会的に作られていることを学習させ、その多様な可能性を議論させる構築主義社会科論を提起し、その妥当性を実験的実証的に吟味することを目的とする。

## 3. 研究の方法

上述の目的を達成するために、本研究では、次の3つの段階を踏まえた研究方法を取った。

### (1) 構築主義社会科論に基づく中学校社会科教育課程の開発

まず、社会学や政治学等の社会科学の知見を参照するとともに、その考え方に基づく中学校社会科の教育課程を開発した。具体的には、地理的・歴史的・公民的分野それぞれ6単元から成る教育課程を開発した。

### (2) 構築主義社会科論に基づく中学校社会科授業モデルの開発

次に、仮説的に提示した教育課程に基づいて、授業開発の対象となる単元を選択し、その授業モデルを開発した。具体的には、地理単元「障害者問題を考える」及び歴史単元「遺跡保存問題を考える」の授業モデルを開発した。

### (3) 授業モデルの実践と学習評価の実施

最後に、構築主義社会科論の妥当性を吟味するために授業モデルの実践と学習評価を実施した。具体的には、単元「障害者問題を考える」に関する授業資料やワークシートを作成するとともに、熊本県甲佐中学校第2学年の生徒を対象に授業及び学習評価を実施した。

以上のような3つの段階を踏まえることによって、本研究の目的に迫った。

## 4. 研究成果

### (1) 構築主義社会科論という新しい社会科教育論を提起したこと

本研究では、構築主義社会科論という新しい社会科論を提起した。これまでに提起された社会科教育論では、価値多元社会に相応しい国家・社会の形成者を育成する中学校社会

科の教育課程を編成することができなかつた。経験主義の社会科教育論は、問題解決学習を組織することによって、自分の日常生活の現実を反省させ、他の立場の人々にも開かれた生き方を議論させることができるが、分野制の下で実現可能な教育課程を編成することができない。系統主義の社会科教育論は、地誌・通史・制度学習を組織することによって、分野制の下で実現可能な教育課程を編成することができるが、日本人や日本国民の立場からみた地理や歴史や社会の事実を客観的真理として絶対視させてしまうことになっていた。科学主義の社会科教育論は、探求学習を組織することによってより質の高い社会認識形成を保障する教育課程を編成することができるが、科学者の立場からみた地理や歴史や社会の事実を客観的真理として絶対視させてしまうことになっていた。それに対して、本研究では、構築主義に基づく新しい社会科教育論を提起した。構築主義社会科論とは、地理や歴史や社会の事実を人々に外在する客観的真理ではなく、それが社会的に作られていることを子どもに学習させ、その多様な可能性を議論させる社会科教育論である。そのため、この社会科教育論に基づけば、日本人や日本国民だけでなく、様々な立場からみた地理や歴史や社会の可能性を議論させることができるため、価値多元社会に相応しい国家・社会の形成者を育成する中学校社会科の教育課程を編成できることを明らかにした。

#### (2) 地理的分野と歴史的分野で論争問題学習の授業モデルを開発したこと

本研究では、地理的分野と歴史的分野において論争問題学習の授業モデルを開発した。これまでも、論争問題学習を組織する社会科教育研究は数多くなされてきた。例えば、小原友行氏の合理的意思決定論、溝口和宏氏の開かれた価値観形成論、吉村功太郎氏の社会的合意形成論、佐長健司氏の議論する社会科論、池野範男氏の市民社会科論等が代表的であろう。しかしながら、これらの研究は、公民的分野や高校公民科の授業開発に偏っていたり、地理的・歴史的分野を視野に入れた教育課程を十分に編成したりすることができていなかった。それに対して、本研究では、地理的・歴史的分野を視野に入れた教育課程を編成し授業モデルを開発した。地理的分野では、障害者問題を教材にした身近な地域の学習の授業モデル「障害者問題を考える」を開発した。単元「障害者問題を考える」では、トイレや学校等の身近な環境の空間配分のあり方争点となる障害者問題を教材にすることによって、障害者と健常者の空間意識を学習させ、そのよりよい空間配分のあり方を子どもに議論させる授業を開発した。また、

歴史的分野では、遺跡保存問題を教材にした古代史学習の授業モデル「遺跡保存問題を考える」を開発した。単元「遺跡保存問題を考える」では、古代史の記憶保存のあり方が争点となる遺跡保存問題を教材にすることによって、市民団体と県や市の歴史的記憶を学習させ、そのよりよい記憶保存のあり方を子どもに議論させる授業を開発した。なお、単元「障害者問題を考える」の授業モデルについては、熊本県甲佐中学校第2学年の生徒を対象に実験授業を実施した。実験授業の結果、学習意義を実感した子どもも多く、授業モデルの有効性を確かめることができた。本研究では、これまで公民的分野の授業開発が多かった論争問題学習を地理的分野と歴史的分野でも組織できることを明らかにした。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

- ① 藤瀬泰司、開かれた公共性の形成をめざす中学校社会科授業の開発、熊本県社会科教育学会、2010年12月4日、熊本大学(熊本県)
- ② 藤瀬泰司、開かれた公共性形成論という理論の探求—中学校社会科の教育内容開発研究を通して—、全国社会科教育学会、2010年10月31日、同志社大学(京都府)
- ③ 藤瀬泰司、法的論争問題による歴史教育の改革—単元『遺跡保存問題を考える』の授業開発を通して—、社会系教科教育学会、2010年2月21日、兵庫教育大学(兵庫県)
- ④ 藤瀬泰司、正当性批判学習としての社会科授業構成の原理と方法—中学校社会科地理的分野の授業開発を手がかりに—、全国社会科教育学会、2009年10月11日、弘前大学(青森県)
- ⑤ 藤瀬泰司、構築主義に基づく教科課程編成の原理と方法—中学校社会科の教育課程改革を手がかりに—、日本カリキュラム学会、2009年7月11日、神田外語大学(千葉県)

[図書] (計1件)

- ① 藤瀬泰司、他、中学校社会科教育、学術図書出版、2010年、193

[その他]

- ① 実験授業「障害者問題を考える」、2010年12月20～22日(全4時間)、甲佐中学校(熊本県)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤瀬 泰司 (FUJISE TAIJI)  
熊本大学・教育学部・准教授  
研究者番号：30515599

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：